

“扇”に関する文献と稀観書

司書2課（参考係）尾崎弘美

もともと古代エジプトをはじめとして暑い地方で風を送り虫をはらうために用いられた“扇”は英語でファン fan、フランス語でエバンタイユ éventail と呼ばれ、中世以降はアクセサリーとして西洋でも珍重された。近世はとりわけ貴婦人の必携品として愛用され、ルイ王朝のフランスを中心に盛んに製作されるようになった。

“扇”の形は大きく分けると団扇（うちわ）型 rigid fan, screen fan と扇子（せんす）型 folding fan の2種類になる。団扇型は古代オリエント諸国や、中世から近世のヨーロッパでもイタリアをはじめ各地で盛んに用いられていたが、日本で発明したといわれる折りたためる型、いわゆる扇子型が16世紀末に東洋から伝わると、やがてこちらが主流となった。

扇面には紙・羊皮紙・レース・絹などを用い、名工に華麗な絵を描かせた。フランスモードの発展とともに17世紀前半は“扇”も発達して一般化するようになるが、18世紀に入ってから全盛を極めた。そして田園に遊ぶ男女・妖精・花輪・支那趣味などのロココ風の絵を描いた傑作が数多く生まれ、骨は金・銀・象牙・真珠母貝を用いた入念な扇が作られた。18世紀末から19世紀には、骨や薄板を機械で彫ったり図柄がプリントされるなどして大衆化し、イブニングドレスなどには欠かせないアクセサリーとなった。

図書館では19世紀後半から20世紀初頭にかけて“扇”についてまとめられた以下の貴重な6点の文献を所蔵している。

1) S. Blondel 著 Histoire des éventails; chez tous les peuples et à toutes les époques. (K 383.4-B) 『扇の歴史；すべての民族と時代にお

ける』は1875年に刊行され、図版も小さいながら載っている。

2) Charlotte Schreiber 著 Fans and fan leaves. 1888~1890 (383.4-S-1,2) 『扇と扇面』は57×40cmの大きな2巻本である。この文献は著者によって後の1891年に British Museum に寄贈された扇コレクションの一部をフルサイズで石版印刷したものである。先に英国の扇を扱った巻を出し、2年後外国の扇を集めたものを出している。英国版は、159枚の扇面と2枚の17図の trade cards の図版からなる。外国版はフランスが109枚、イタリア、スペイン、ドイツ、オランダが7~17枚、飾り文様2枚で構成されている。



ポール・イリブ画 “L'éventail et la fourrure chez Paquin”より

- 3) M. A. Flory 著 A book about fans; the history of fans and fan-painting. 1895 (383.4-F) 『扇に関する本; 扇と扇の絵付けの歴史』には絵付けの技術や扇の収集についても言及されている。
- 4) G. W. Rhead 著 History of the fan. 1910 (383.4-R) 『扇の歴史』は後世の文献にもしばしば引用・紹介されており、基本的な文献といえる。450部の限定出版で当館所蔵のものはそのNo.38である。内容は扇の起源、古代の扇、極東の扇、未開民族の扇、初期の羽扇、17~18世紀の絵の描かれた扇(イタリア・スペイン)、同(フランス)、同(イギリス・オランダ・フランドル・ドイツ)、銅版印刷された扇1、同2、近代及び今日の扇の章にわかれ、インデックスがついている。カラーまたはハーフトーンで描かれたプレートが含まれている。
- 5) 趣が異なるのが、Octave Uzanne 著の The fan. 1884 (383.4-U) 『扇』である。1882年/パリで刊行された“L'éventail”の英訳で Paul Avril の挿絵と扇に関する逸話や詩・文学などがとりあげられている。読み物的な文献であり、他の実用的な文献とは異なる。
- 6) Charlotte M. Salway 著 Fans of Japan. (383.4-S) は1894年に著された。東洋、日本への関心が扇の分野でも、向けられていたのがよく分かる。

また、19世紀後半には扇の展覧会が各地で開かれていたことも、各種の文献からうかがわれる。今世紀に入ってからの展覧会カタログ及び博物館の所蔵品カタログは当館にも10冊近くある。例えば、L'éventail; miroir de la belle époque. 1985 (383.4-E) 『扇; ベルエポックのかがみ』はこの年/パリで開かれた展覧会のカタログで1900年代初期のフランスの扇を集めたもの。また Royal fans. 1986 (383.4-R) 『王家の扇』は17~20世紀のイギリス女王、王女の扇を200点あまり集めた展覧会カタログである。

“扇”に関して歴史や種類、材料等についてまとめられたものは、今世紀初期のものでは M. Percival 著の The fan book. 1921 (383.4-P) や Rosalie Welis 著 Fans. 1928 (383.4-W) がある。新しいところでは、Nancy Armstrong 著 The book of fans. 1978 (383.4-A) や、Françoise de Perthuis et Vincent Meylan 著 Eventails. 1989 (383.4-P) などカラーの図版が豊富で美しい文献がたくさんある。

“扇”について注目すべき事柄のひとつに “Language of the fan” があげられる。「扇は17世紀から19世紀にいたるまで一定のルールに基づいたコケットリー(お洒落)の武器とみなされていた。」(フェアチャイルドファッション辞典) とあるように扇の使い方にはいろいろな意味がこめられていた。例をあげると、左手で持ち顔の前に広げるとそれは「あなたとお近づきになりたい」、閉じた扇を差し出せば「あなたは私を愛していますか」、大きく広げて「待っていて」…などである。特にスペインで流行し、イギリスでも1711年にはスペクテイター紙に風刺めいた記事が掲載されるほどに関心を集めていたようだ。(今でもデイスコジュリアナ東京などでお立ち台の上で踊る若い女性が手にした扇をひらめかせている光景がみられるが、そのルールと言えなくもない。) この “Language of the fan” について言及している文献は上記の4) History of the fan や6) Fans of Japan の他、Nancy Armstrong 著 A collector's history of fans. 1974 (383.4-A) 『ある収集家の扇の話』や Mary Gostelow 著 The fan. 1976 (383.4-G)、Héliène Alexander 著 Fans. 1984 (383.4-A) などにも記載がある。

最後に紹介するのは L'éventail et la fourrure chez Paquin. 1911 (383.4-E) 『パーキンの店の扇と毛皮』である。これは見本帳で、ポール・イリブやル・パブといった当時の人気挿絵画家による扇面の図案や毛皮を身につけたファッションプレートが美しいポショワールで7枚収められている。